

令和3年度森のキッズキャンプ  
体験の風をおこそう from うだ主催事業  
(企画運営：国立曽爾青少年自然の家)



るのではないかというスタッフの心配は見事に裏切られ、夜はすぐに寝てしまった。

スケジュール

|     | 主なスケジュール                                                       |
|-----|----------------------------------------------------------------|
| 1日目 | 榛原駅北口（集合）<br>はじまりの会<br>昼食（食堂）<br>森の自由遊び<br>夕食（食堂）<br>キャンプファイアー |
| 2日目 | 朝のさんぽ<br>朝食（食堂）<br>森の自由遊び<br>昼食（お弁当）<br>おわりの会                  |

## 1. 目的

自然のなかで思い切り遊ぶことを通して、生活のリズムを整え、自然への興味、関心を高める。

## 2. ねらい

- ①幼児に自然体験と生活体験を提供する
- ②幼児の自然環境を活かした運動遊びプログラムの実践の機会とする
- ③森林を場にした環境教育（自然にふれ、思い切り遊び、感じる）の機会とする

## 3. 実施日

- ①夏のキャンプ  
令和3年7月17日（土）～7月18日（日）
- ②秋のキャンプ  
令和3年10月9日（土）～10月10日（日）

## 4. 対象者

幼稚園・保育園 年長児

## 5. 参加者 / 募集定員

- ①20名／16名
- ②14名／16名

## 6. プログラム（要約）

幼児が主体的に自分の意思で遊びをつくる「森の自由遊び」を中心に実施した。はじめのうちはきっかけづくりとしてたき火などいくつかの選択肢を提示し、その遊びをしていたが、だんだんと豊かな発想で活動が派生し、木登りや草の斜面でのそり遊びなどに展開していった。4～5人程度の小グループで生活し他者とも関わる機会を作り、保護者から離れての宿泊、生活体験も重視した。

森の中から、木や葉を集めてきてたき火をしたり、まき割りをしたり、木や枝で弓矢を作ったりと、とにかく森の中を走り回っていたので、ホームシックにな

## 7. 調査

事前と事後に絵をかいてもらい、その違いについて比較し、どのように体験が意識づけられているかを考察した。

### ①事例1 A児（女兒）

上：キャンプ前に描いた絵

下：キャンプ後に描いた絵



木の絵がリアルに表現されるようになった。枝、葉

の様子がしっかり描かれるようになった。事前の遊びのイメージが、体験後、実際に体験した遊び（テント遊びやたき火）に変わっている。

## ②事例2 B児（女児）



上：キャンプ前に描いた絵

下：キャンプ後に描いた絵

事前にした絵本のような世界が、実際に見た表現に変わった。人物が登場するようになり笑顔で描かれている。木の木肌の色合いが濃くなった。葉に隠れた枝の様子まで描かれるようになった。

## 8. 保護者アンケートから

・（帰ってきて）少し疲れているようでしたが、いつも通り元気でキャンプのことを教えてくれました。ふだんはやらせようことに慣れていて甘えることが多かったのですが、自主的に動くようになりました。朝の用意をさっと済ませるようになりました。一人でもキャンプに参加できると自信がついたように思います。ぜひまた参加させたいです。

・榛原駅から電車で帰ったのですが、自分の荷物だけでなく、私の荷物も持ってくれました。あきらめずがんばる、やってみる、優しさや自信がついたように思います。貴重な体験をありがとうございました。たくさんお話を聞かせてくれました。

・出発時は少し不安げな顔をしていて、バスから降りてきたときに泣きそうな顔をしていて、寂しかったのかと思いきや、楽しすぎて帰りたくないと言っていてい

ました。家でも終始楽しそうに話してくれました。泣いてしまうくらい楽しんできたこと、一人でキャンプに参加できたことで言動がしっかりしたので、子どもの背中が急に大きく見えました。先生方の名前がニックネームなのも親近感があって良かったです。

## 9. まとめ

2年目のチャレンジは、より子どもの主体性に任せることだった。リーダー（ボランティア）が幼児キャンプの経験を積み、見守ること、任せることができるようになってきた。

施設として、森林環境教育の取り組みをすすめているが、幼児期は森について学ぶよりも、その土台となる「関心の喚起」や「生命との関わり」「豊かな感性」「好奇心」そして「思考・判断・表現の基礎」が大切である。このキッズキャンプがその役割を果たせるように心掛けた。「絵」の事前事後の変化をみると、まさに上記の部分が垣間見えるように思う。

このこととは別に「生活力の向上」や「自信をつける」ことも保護者アンケートから見て取れる。一貫し、継続していく取り組みが、結果、「目指すところ」につながっていくのか、見ていきたい。

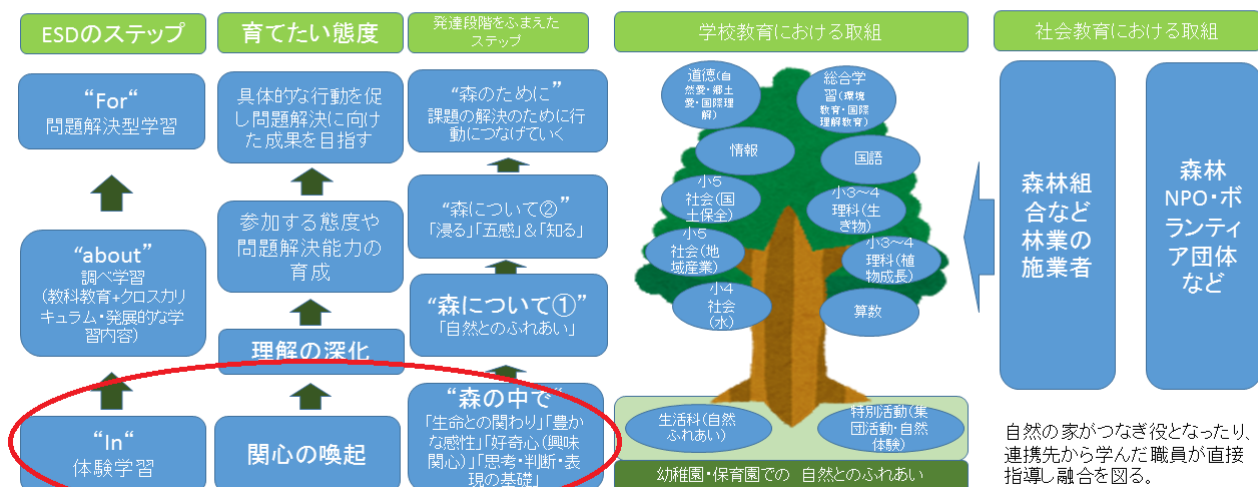
（企画指導専門職 高瀬 宏樹）





## 国立曽爾青少年自然の家における森林環境教育(森林ESD)の体系イメージ図(たたき台)

教育・森林・環境分野の幅広い視点を併せ持ち、アクティブラーニング(主体的・自主的)の視点、教科横断的な視点を持ち、「地域の発展・活性化」につながる活動であること。  
 【曽爾青少年自然の家の目指すところ】 「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養う」 ※教育基本法第2条4号  
 「豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となる」 ※学習指導要領及び環境教育指導資料



図：体系イメージ図 (たたき台) ※検討中

赤の囲み部分がキッズキャンプ事業が担う部分

### ●夏のキャンプのようす



### ●秋のキャンプのようす

